企圖を秘匿しつつ現戰線を離脫し一擧に喜屋武半島陣地に後退するを主義とするも有力なる一部を各要線に殘置して地域的持久抵抗を行ふ第一線主力の撤退時機は五月二十九日夜と豫定す第六十二師團の與那原方面反擊奏功せず之を延期す

部署の概要

一、第六十二師團は五月二十五日夜首里出發津嘉山附近を經て同地東南地區に轉進し與那原方面より突進する敵を擊滅す止むを得ざるも敵の突破を現在線以北に阻止し軍主力の退却を掩護す首里直接防禦部隊たる獨立歩兵第二十二大隊は之を殘置し第二十四師團長の指揮下に入らしむ

二、第二十四師團は五月二十九日夜主力を以て現在線を撤し其の作戰地域を新陣地に後退す

各有力なる一部を左記要線に殘置し逐次敵の前進を遲滯せしめつつ後退す

現陣地線

五月三十一日夜撤退

喜屋武、津嘉山、國場川の線

六月二日夜撤退

繞波川の線

六月四日夜撤退

三、獨立混成第四十四旅團

五月三十一日夜一擧に現陣地を撤し新陣地に後退す

四、各兵團の退却地域の境界左の如し

（第六十二師團の轉進後のものとす）

第六十二師團第二十四師團間

兼城、津嘉山東端、山川、東風平東端富盛線

（線上は第六十二師團に屬す）

第二十四師團獨立混成第四十四旅團間

眞玉橋、小城の線（線上は第四十四旅團に屬し小城以南の行動は自由とす）

東京小津堂

五、軍砲兵隊

依然現任務を續行特に第六十二、第二十四師團の與那原方面に對する退却攻勢に協同す

全砲兵の後退は三十日拂曉迄に完了する如く準備す

六、海軍根據地隊

現陣地の外有力なる一部を以て長堂西方高地を占領し軍主力の退却を掩護す退却の時機は全般の作戰推移を考察し軍司令官之を定む

五月二十四日

第二十四師團は與那原に進入せる敵を擊攘する能はず

軍は海軍陸戰隊の一部、軍砲兵隊にて臨時編成せる徒步部隊約一大隊曾つて與那原正面の守備に任ぜし第二步兵隊第三大隊（第六十二師團の指揮下に入り澤嶋附近の戰鬪に參加し生存者大隊長以下約百名）等軍として使用し得る限りの兵力を第二十四師團に增加せり

第六十二師團は正面を大名末吉の線に縮少し敢鬪中なり

獨立混成旅團は那覇市方面に於て逐次蠶食せられつつあるも天久台東南角は依然頑守しありて其の健鬪員に賞讃に價す

軍の後方整備は續行中なるも折から沖繩の雨季襲來し道路は泥濘と化し輸送意の如く進捗せず

五月二十五日

第二十四師團は運玉森高地を、重砲兵第七聯隊は雨乞森高地を夫々奪取せられ敵突破口の尖端は島袋附近に到達す

軍は極力右諸部隊をして突破口の擴大を阻止せしめつつ第六十二師團主力（戰鬪員約三千）を首里地區より津嘉山東南地區に轉用し惡天泥濘の爲に敵の戰車、空軍艦砲の活動困難且物量の戰線補給十分ならざるに乘じ與那原方面に退却攻勢を取り敵に痛擊を加へ以て軍主力後退の自由を確保し爲し得れば該方面の敵を與那原以北に擊攘し依然首里戰線を保持せんとするに決す

五月二十六日乃至二十八日

東京小津印刷

第六十二師團は二十五日夜先ず歩兵第六十四旅團を津嘉山東方地區に先遣し該地區に在りて臨時敵の突破に備へありし特設第三聯隊其の他部隊を併せ指揮し概して喜屋武宮平の線を保持せしむと共に師團主力は二十六日夜神里東南地區に轉進し當時雨乞森、犬里城趾を喪失し眞境名、稻福方向に進退中なりし重砲兵第七聯隊船舶工兵第二十三聯隊竝に軍命令に依り知念半島より北進中なる特設第四聯隊主力を併せ指揮し二十七日頃平良附近に進出南下する敵に對し攻擊を開始せり

第二十四師團及混成旅團の正面は全線敵に滲透を恣にせられありて軍司令官は二十八日全般の狀況特に第六十二師團の攻擊意の如くならざるに鑑み豫定の如く二十九日夜を期し喜屋武半島地區に後退するに決せり之より先軍司令部は二十七日夜津嘉山に移動せり海軍根據地隊は軍の企圖を誤解し逐次喜屋武半島地區に後退中なりしが軍命令を正解するや再び小祿地區舊陣地に復歸せり

其の六　軍の喜屋武半島地區への後退（自五月二十九日至六月四日）

五月二十九日

第二十四師團主力轉進を開始す

五月三十日

敵の攻擊緩漫にして諸隊の後退は整然と進捗し秩も潰亂の狀なし

軍司令官は二十九日夜津嘉山出發三十日拂曉迄に摩文仁南側八九高地自然洞窟に入る

五月三十一日

第二十四師團第一線殿置部隊竝に獨立混成第四十四旅團第一線を撤退す　第六十二師團の新戰線大なる變化なし

六月一日

右翼第六十二師團正面大なる變化なし

眞里高地を占領せる敵は此の日國揚川の線に現出す歩兵第六十四旅團歩兵第三十二聯隊及海軍根據地隊は本部、津嘉山及長堂の線に於て敵の前進を阻止す

六月二日

歩兵第六十四旅團及歩兵第三十二聯隊は現在の線を撤退す

六月三日

大里城趾より稻福附近を經て知念半島部に對する敵の追擊最急にして先に第六十二師團長の指揮下に入れる樋口大佐指揮の重砲兵第七聯隊及船舶工兵第二十三聯隊の殘存部隊は逐次糸數方向に後退しつゝ爾余の正面に於ける敵の追擊は活發ならず第六十二師團主力は稻嶺東西の線に歩兵第二十二聯隊は友寄附近繞波川の線に在り

海軍根據地隊は一部を以て依然長堂、根差部附近を保持しあり喜屋武陣地に後退し來たれる船舶團長大木中佐以下約一千五百既に新陣地に配備を終れる獨立混成第四十四旅團長の指揮下に入らしむ

六月四日

第六十二師團、第二十四師團各主力獨立混成第四十四旅團軍砲兵隊夫々喜屋武新陣地に後退す

重砲兵第七聯隊船舶工兵第二十三聯隊は獨立混成第四十四旅團長の指揮下に復歸し知念半島地區に策動して敵の背後を擾亂すべき任務を受領す

新陣地に集結し得たる推定總兵力左の如し

第二十四師團同配屬部隊	一二〇〇〇
第六十二師團〃	七〇〇〇
獨立混成第四十四旅團〃	三〇〇〇
軍砲兵隊〃	三〇〇〇
軍直轄諸部隊其の他	五〇〇〇
合計	三〇〇〇〇

以上の數字は各兵團の概ね掌握せる兵力にして實數は更に大なるべし又首里戰線後退の頃の推定總數は約五万なりしが前述の數との差大なるは退却作戰中の消耗を語るものなり

殘存の人員は右の如く大なるも其の殆大部は未訓練の後方人員防

東京小津社

衛召集者等にして精鋭なる戰鬪兵員は各部隊とも開戰當初の二割内外と判斷せられたり然れとも大隊長以上の幹部の戰死は左の如く比較的僅少にして指揮能率は尙概して健全なり

第六十二師團　參謀　一

歩兵大隊長　一

第二十四師團　歩兵大隊長　三

獨立混成旅團　歩兵大隊長　一

軍直轄部隊　戰車聯隊長　一

特設聯隊長　二

獨立歩兵大隊長　一

獨立機關聯隊長　一

獨立速射砲大隊長　一

獨立大隊長　三

其の他省略

東京小津船

人員に比し兵器の損耗は特に甚大にして歩兵自動火器は五分の一歩兵重火器は十分の一（殆皆無）程度に減少手榴彈、急造爆雷も亦殆皆無なり只予想外に損害少かりしは砲にして野砲級二分の一を存し特に軍砲兵は尙16糎四、15糎一六、AA約一〇を保有しあり

此の日小祿海軍地區に於ては敵は〇五〇〇鏡水より大嶺を經て具志に亘る海岸に上陸し一擧に那覇糸滿街道の線に進出し海軍部隊の主力は金城、豐見城、宇榮茂間の地區に在り

其の七　喜屋武半島地區の戰鬪（自六月五日至六月二十三日）

六月五日

知念半島方面よりする敵第七師團佐敷西方へ上陸逆擊は頗る急にして既に約二〇〇の敵は具志頭附近に現出せり

首里地區より喜屋武地區に避難せる非戰鬪員に對しては五月下旬知念方面に移動する如く命ぜられありしが該方面敵の近迫に伴ひ再び喜屋武地區に復歸するもの多し

六月六日

具志頭附近守備の獨立混成第十五聯隊第一大隊先ず近迫する敵と激闘を開始す

安里附近に陣地を占領せる獨立白砲第一聯隊は軍砲兵隊長の指揮を脱し獨立混成第四十四旅團長の指揮下に入る

海軍根據地隊は金城、小祿、豐見城間の地區に包圍壓縮せられんとしあり

機密作戰日誌

海軍部隊は喜屋武陣地に於て陸軍に合流戰闘すべき軍の計畫に從ひ五月下旬小祿地區の防禦施設を破壞し喜屋武方面に後退中なりしが其の退却時機軍の企圖に反し過早なるを知るや司令官太田海軍少將は極めて明快に小祿地區奮陣地に復歸せるは既述の通りなり

軍司令官は軍主力の退却完了し海軍部隊之が掩護の任務を完遂せる今日刻々被包圍の態勢に陷りつゝあるを見既定の一般計畫に從ひ主陣地帶内への後退命令を發せり

然るに太田少將は海軍部隊は既に殆敵に包圍せられし爲後退不可能なりとし最後迄小祿地區に於て戰はんことを懇請せり從來の行き懸りを一擲し作戰上の見地より觀察せば海軍部隊の現陣地固守は敵の那覇港及小祿飛行場の使用を遲延すると共に軍主力に對する運命決定せる今日無力なる海軍部隊に僅かなる作戰的效果を期待して之を軍主力指呼の間に孤立無援全滅せしむるは人情上眞に忍ぶ能はず依つて軍司令官は退却命令を再電命すると共に聲涙共に下る懇切なる親書を送付せり

斯かる陸軍側の措置にも拘らず海軍側の決意は牢固として拔くべからず遂に自然の推移に委するの止むを得ざるに至れり

六月七日

具志頭附近の戰闘愈々激化す

當初混成旅團長は具志頭五三高地附近の陣地は前進陣地たらしむる予定なりしも同陣地の價値に鑑み主陣地帶の一部と見做し之を頑守するに決せり

六月八日

敵の一部情勢に上陸

敵の大部隊は東風平附近に南下したる後逐次志太伯附近を經て西方我が左翼方面に近接中なり

志太伯附近に在りし歩兵第二十二聯隊第一大隊は主陣地内に後退せり

六月九日

當初軍は地形上敵の重壓は第二十四師團左翼方面に指向せらるゝ算大なりしも海軍部隊が小祿地區を死守するに至りし爲第二十四師團正面未だ敵と觸接せざるに混成旅團正面の戰鬪既に激化しつつある狀況竝に海正面に對する敵の策動活潑ならざるに鑑み予備兵團たる第六十二師團に命じ其の二ケ大隊を隨時混成旅團增加し得る如く待機せしむると共に同方面への全力機動を準備せしめたり

我が左右兩翼に對する敵の攻擊時機が先後せしは前述我が海軍の小祿地區死守の外敵の第二十四軍團と海兵第三軍團の戰法の相違に基因するものならん卽ち我が右翼に迫れる第二十四軍團が滲透戰術を取るに反し我が左翼を攻擊する敵海兵軍團が十分攻擊準備を整へたる後一擧に全縱深を突破する戰法を採用せるに因るものなり

六月十日

混成旅團全正面敵の猛攻を受く

第三十四師團正面の敵は漸次我が陣地に觸接しつゝあり

六月十一日

混成旅團正面敵の攻擊重點は安里附近にして敵の戰車用法は首里戰線當時に比し大規模且大膽なり敵は主力を依て安里正面を猛攻すると共に十數輛より成る戰車群を以て安里北側一三三高地東側より八重瀬岳守備隊の背後に進攻す敵の此の進攻路は軍が予ねて地形判斷上竝に旅團の左翼區隊たる特設第六聯隊が配備の重點を八重瀬岳山頂に保持せず東麓列崖下に置きて陣地を占領しありしと鑑み彼の牧港、伊祖附近に露呈せし其れと同樣の弱點を認め混成旅團に注意を喚起し置けるところなるに再び敵に乘ぜられたる

東京小津堂

は遺憾なり斯くて軍主陣地帶内の二大據點の一たる八重瀬岳の基盤龜裂を生じ其志頭守備隊又全滅し混成旅團の兩翼危急に瀕し其の全陣地頓に弱化す

左小祿海軍根據地隊司令官より左記要旨の最後の電報を受領す

記

敵戰車群は我が司令部洞窟を攻擊中なり根據地隊は今十一日二三、三〇玉碎す從前の厚誼を謝し貴軍の健闘を祈る

六月十二日

第三十四師團正面の敵全線攻擊を開始す

歩兵第三十二聯隊の陣地國吉台附近戰鬪最激烈にして第一線諸隊砲兵協同のもと善戰し敵に甚大なる損害を與へつゝあり

數日來混成旅團正面のみ激鬪を續け第二十四師團方面の戰況頗る困難なる爲軍は同師團が戰はずして混成旅團の陣地を突破せる敵の爲背面より攻擊せられて潰滅することを憂慮し軍統帥上の名譽に堵て右翼正面の過早なる崩壞阻止に努力しありしが軍首腦部は

茲に於て初めて重荷を下せるの感あり

混成旅團の中央（與座仲產附近）及右翼（海岸に面せる斷崖上）の戰鬪熾烈を極め敵は時に依り五、六十輛以上の戰車群を以て我が陣地を蹂躙す更に旅團は其の左翼との連絡を失し八重瀬岳方面の狀況を把握しあらざるのみならず同方面を强化する餘力なきものゝ如し

八重瀬岳失陷に因る危險を痛感する第二十四師團及軍砲兵隊より之が保持强化の要求頻りなり

軍は一兩日來軍砲兵隊、軍通信隊等より抽出せる少くも六ヶ中隊の臨編歩兵部隊を茲に今日迄軍司令部に控置しありし第二野戰築城隊の主力を混成旅團に增加しつゝあるも裝備劣弱訓練未熟なる部隊なる爲に戰鬪加入と共に直に甚大なる損害を受け所謂燒石に水の感あり

第六十二師團の獨立歩兵第十三大隊同第十五大隊を混成旅團長の指揮下に入らしむ